

穂積重遠

—初代学園長・日本法社会学の先駆者—

学校法人白梅学園理事長 小松 隆二



私の心の内なる穂積

今、私の手元に穂積重遠（しげとお）の色紙が2葉ある。一方には一九四五年八月一五日の終戦大詔の放送を思い出しつつ、同年の暮れに詠んだ「任は重く道は遠しのみことのりけふをことほぐ心いましめむ」、もう一方には「昭和二十一年春、葉山海岸の御遊に待す」との添え書きとともに「老の將に至らんとするを忘れけり皇子ときほひて磯にはぜ追ふ」の歌が筆書きされている。いずれにも穂積東宮大夫の署名がある。

この二葉の色紙は、財団法人社会教育協会が穂積の『新譯論語』（一九四七年）を刊行する際に、資金援助をした私

の祖父に御礼として贈られたものである。一方の色紙の裏面に「新訳論語出版についての芳情を感謝して論語の本文を詠み込める国風二首を小松栄介君に捧ぐ」と為書されている。

私の手元にこのようなものがあるのは、祖父から引き継いだものである。活字や写真でしか触れることのなかった穂積が私にとっては何となく身近な存在として脳裡に残ってきたのは、これらの色紙を子供の頃からよく見ていたからである。

白梅学園と穂積

法社会学や民法の大家として知られる穂積重遠について

は、専門家として近い人もまだ多く、またすでに優れた論作もある。法学に門外漢の私が改めて説明しても、新しいことなど少しも加えられるはずはなく、意味もない。法学者としての穂積については割愛し、今回は白梅学園との関係や教育者としての一面などに僅かに触れる程度にとどめさせて頂く。

穂積と白梅学園の関係は長く深い。白梅学園の前身の東京家庭学園の設置母体となった社会教育協会には創設段階から関係した。一九二五年に財団として認可された際には、穂積は初代理事長に就任している。財団の設立に必要な基金三、〇〇〇円は穂積が用意したものであった。

白梅学園には、その前身の東京家庭学園時代から深く関わった。戦時下の一九四二年、東京家庭学園が創設されるが、穂積は学園長に就任した。修身・公民の講義も担当した。一九四四年、戦争末期に当局の指示により、学園は閉鎖の止むなきに至った。それを受けて、社会教育協会は勤労女子青年練成所を併設するが、所長には穂積が就任した。戦後の混沌とした時勢にも、学園長として再建に尽力した。戦災にあった事務所・寮は、穂積と縁戚関係にある故阪谷芳郎前社会教育協会会長の旧宅(渋沢栄一の顕彰財団龍門社)を一時借用するなどしてしのいだ。

しかし社会教育協会や白梅学園の財政は厳しく、穂積学

園長に一時的に恩借したり、寄付を仰ぐことが行われた。

そのような混乱がまさに始まるうとしていた一九四五年八月、終戦とともに皇太子の教育にあたるべく東宮大夫兼侍従長に就任する。その折、学園という公益法人であれ、個別法人の最高責任を有する理事長の職にあることは問題という判断で、辞任することになった。ただし、後任理事長は小松謙助に託したものの、その後も社会教育協会会長とともに、学園長の地位にはとどまった。講座として法律概論も担当し続けた。また一九五〇年に、学園付属幼稚園の設立に際しては、園長にも就任した。

このように穂積と社会教育協会および白梅学園の関係は、没年まで続き、二五年以上にも及んだ。

穂積の足跡

穂積は一八八三(明治一六)年、東京生まれ。東京育ちである。ただし父穂積陳重(のぶしげ)は宇和島の出身。いまま同地には日本最初の法学博士となるなど郷土の生んだ偉大な法学者陳重を記念する穂積橋が辰野川の下流に架かっている。母歌子は明治財界の大御所と言われた渋沢栄一の長女で、渋沢は重遠にとつては祖父にあたる。白梅学園が渋沢家と縁が深かったのは、穂積と社会教育協会初代会長阪谷芳郎を通してのものである。

穂積は、一九〇八年、東京帝国大学法科大学卒業。講師、助教授を経て、一九一六年、第一次世界大戦の戦火が拡大し、日本には大正デモクラシーの波が本格化しはじめるときに教授に就任した。時に三三歳という若さであった。

この間、教授就任直前までの四年間、ドイツ、フランス、イギリスなどヨーロッパ諸国に留学する機会を得た。日本では明治末から大正初年にかけて研究や思想の自由が極端に抑制されていたが、そんな日本を離れ、激動の波が押し寄せてはいたものの、自由な空気が横溢する彼地で西欧の法学を学ぶことができた。

関東大震災の被災の救援活動を機に、同僚の末弘巖太郎らとともに、東大のセツルメント活動を教授として指導・協力することになった。この活動を基に、東大における民主主義の流れ、学生の社会的活動の展開に貢献することになるが、戦前・戦後を通して社会事業の諸活動・団体にも親しく協力する契機になっていく。

それ以外にも、戦時下に貴族院議員、戦後になって最高裁判所判事も勤め、大学教授の枠を超えて活動を拡大した。

父陳重に関連して言えば、親子二代法学部長を勤めている。同じく東大教授であった八束は陳重の弟。陳重は子息の重遠を媒介に、日本社会の民主主義化を進める流れを生み出すことになるが、八束は上杉慎吉、その門下生である

岸信介などの流れを生み出していく。陳重が、第八束の死後、遺稿集の刊行に乗り気でなかったのは、学問的認識の相違とともに、そういった国家主義につながる危険な右寄りの流れを予感したからではなかったかと推測したくなる一面がないわけではない。

穂積は、優れた法学者であるとともに多くの趣味を持っていた。短歌に親しみ、観劇が好きで、歌舞伎などにも造詣が深かった。穂積を継いで二代目白梅学園長を勤めた牧野英一が短歌を作り、旅行を趣味としていたのによく似ているであろう。

教育者としての穂積

私が穂積のことでとくに引かれるのは、先導的な研究者であるとともに優れた教育者であったという点である。

穂積は古き良き時代の学者であった。同時に象牙の塔に引きこもるタイプではなく、上記のように実践活動、それも当局より忌避されるような活動に参加することをも厭わなかった。それだけに、古き学者でも、学問のための学問といった形式や論理にのみ偏る感じは与えない。むしろ学問に対する気持ちや姿勢としては、該博な知識や教養に基づく深い研究の在り方に、実践を加味する姿勢を示すことによって、学生・若者に対して学問することの厳しさや意

味を教えながらも、同時に余分な重圧感はいひのけ、楽しく学習・研究する取り組みを教えることも忘れなかった。

それでいて、授業には始業ベルが鳴る前には教壇に立つのを常としていた。それに何よりも病気によって休講するなどということは教育者としての自覚・責務を忘れたものとはばかり、日本の大学の恥部である休講とは無縁であった。そこには私どもが反省し、今日も学ぶことの多い教育者としての誠実な姿勢がうかがえよう。

戦後、受験競争や就職競争が激化するが、穂積は早くも戦前からそのようなことが学習・勉学の深さ、楽しさを学生から奪っていることをよく見ていた。たんに受験競争や就職のための勉強では、学ぶことが味気なくなるのは当然と考えていた。東大でも、その流れを防ぎようがなく、学生の学習姿勢が本物の学問ではなく、目先の結果を追う方向に傾くことを、穂積は嘆いた。彼は、そのままでは教育の本来性が失われるようになること、勉学が受験・就職の手段化することを懸念し、批判した。手段としての学問では、その深さ、重さ、そして喜びに触れにくい。そのため、本物に触れるに至らず、学問が楽しくなる前に学問の道から離れてしまう状況を深刻に受け止めていたのである。

こんな具合で、穂積は自ら研究に打ち込むだけでなく、学生にも学問の有益さ、深さ、厳しさ、同時に自由、喜び、

楽しさを教えようとした稀な学究であった。

穂積の残したもの

教育者としての穂積の姿勢・在り方は、学問をたんに学問のための学問、机上の観念論で終わってよいものとは考えていなかった彼の研究者としての姿勢・在り方と結びつくものである。彼は、学問というものが民主主義の発展、市民生活の幸福や安定、とりわけ弱者への配慮に尽くすべきであると考えていた。それだけに、社会正義のための努力や闘いを避けたり、逃げたりはしなかった。

このことは、先に触れたように戦前にセツルメント運動に参加したことや「法律の社会化」に早くから敏感に対応したことなどからうかがえよう。戦前にセツルメント活動に参加したり、指導することは、当局からは要注意人物としてにらまれることであった。にもかかわらず、穂積は、末弘らへの友情もあつたであろうが、あえて貧困や差別など社会悪の排除に取り組むセツルメント運動を避けたりはしなかったのである。

もう一つ、社会的実践家の一面を有していたことに関連して、『論語』の一節「朝に道を学び夕べに死すとも可なり」が穂積の座右の銘であつたことも触れておきたい。あの柔和で円満な表情と同居するように、自らを厳しく律し

ていた一面がそこにはうかがえよう。

『論語』の教えは洪沢家の家訓であった。その学習会も開かれた。穂積も洪沢家の一員として学習会に参加した。後に穂積自身が法学者を超えて、『論語』の研究者にもなったのは、そんな経緯も存していた。人間的な豊かさや穏やかさをたたえながらも、自らの内なる芯には厳格なものを備えていたのは、祖父重舒（しげのぶ）、父陳重と引き継がれた宇和島藩以来の穂積家の伝統・家風に『論語』が加味されたものであったのである。

穂積は、多くの研究・教育の成果、業績、実績を残し、一九五一年七月二九日、六三歳の生涯を閉じた。白梅学園は秀でた学園長と社会教育協会会長を同時に失うことになった。

このような傑出した先達が白梅学園の初代学園長であったことは、本学園にとっては誇り得るすばらしい財産である。

【参考文献】

穂積重遠 『日本の過去・現在及び将来』協和書院、一九三五年

穂積重遠 『新訳論語』社会教育協会、一九四七年

穂積重遠 『歌舞伎思出話』大河内書店、一九四八年

潮見俊隆・利谷信義編 『日本の法学者』日本評論社、

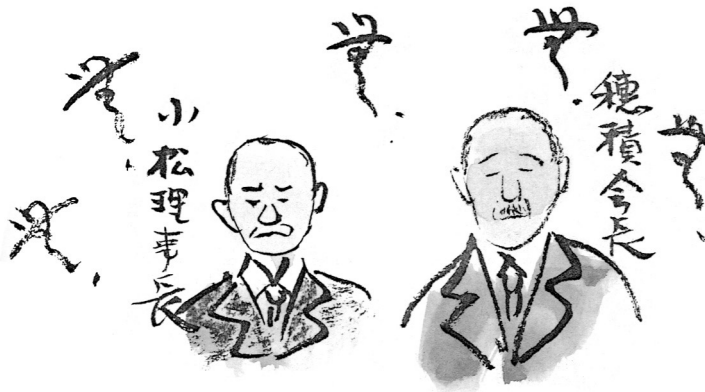
一九七五年

穂積重行 『明治一法学者の出發―穂積陳重をめぐって―』

岩波書店、一九八八年

穂積重遠（穂積重行編） 『欧米留学日記―一九二二―』

一九一六年―』岩波書店、一九九七年



〈小松謙助絵日記より〉